

◆【海員随想】B I S K R A号航海記 (23) ④ 新木繁雄

8 月 20 日 アルジェ接岸中

K物産の乙黒さんが、日本から積荷として積んできたこけし人形、米、酢、餅、サラダ油など、船長から受け取ったけど、トランス（アルジェリアでは電灯線が 200 V で、日本の家電は 100 V に落とさないと使えない）の陸揚げは書類が煩雑で簡単にはできないそうだ。これは日本大使館用に送ってきたものだが、どうなるか分からない。陸揚げできなければそのまま日本へ持ち帰るしかない。

昼食はホテル・オラシーで乙黒さんにご馳走してもらった。羊のスペアリブ、クスクス、野菜サラダ、ワインなど。

乙黒さんと別れて、宿舎のエルビア（村という意味らしい）へ。ここで私に出番が来た。帰りに市場で買ってきた魚のテンプラ作り。日本では見かけることがない魚だけど、ここではポピュラーな魚だという。一見カサゴのように見えるから、底魚なのだろう。これを三枚におろし、小麦粉をつけて揚げた。車エビも油で揚げ 3 匹ずつ付けた。船から持っていった米で、辻さんがカレーライスを作ったが、皆白飯にテンプラをおかずにして食べたのでカレーが売れず、辻さんがすっかりへそを曲げてしまった。夕食後マージャンになった。私一人が大ガモ。

武村と私用に簡易ベッドを組み立て、ミッドナイト頃就寝。

8 月 21 日 アルジェ接岸中

ラマダン中で、さっぱり揚げ荷が進まない。生卵は船倉に積んだままだ。いかに夏の盛りは過ぎたとはいえ船倉の中は日中 35℃を超える。早く陸揚げしないと腐ってしまう。私が心配することではないかもしれないが、人ごとながら気になって仕方がない。

家へ帰っていたアルジェリア人の二等航海士が早々に帰ってきた。「出港までに、まだ何日もあるのにどうしたのだ」と聞いたら「My father kill me」と青い顔で言った。彼は体が小さく細い男だ。自分はラマダンを続けると体が持たないので昼食を食べたら、父が怒って彼をぶん殴った。「そのまま家にいると殺されるから、船へ逃げてきた」と言う。

午後、武村と機関長の奥さんが市場へ買い出しに行った。ユーゴスラビア人がたくさん乗ってきたので、ウェルカムパーティの準備をするのだそうだ。イワシとエビをたくさん買ってきた。船の大冷蔵庫をのぞいたが、腐った野菜ばかりで新鮮なものは何もない。もう一度市場へ行ってナス、タマネギ、キャベツ、オクラ（ここでも O K U R A と書いてあった。何語なのだろうか）、ニンニクも欲しかったが小さなのが 2 カケで 400 円もする。

ストアの隅からフィゴを出してきて、フランスで仕入れた炭で火を起し、焼肉ならぬ焼き魚パーティが始まった。このたび乗船した船長も交え飲みかつ食べた。船長は C N A N の船は初めてだと言っていた。英語、フランス語、ドイツ語、スペイン語、何語でも話せる。

ユーゴスラビアはいろんな国と接しているので、自然といろんな言葉ができるようになるらしい。

私が持っていったサントリーのダルマは魚が焼けるまでになくなってしまった。今度乗ってきたユーゴスラブたちは体が大きいだけあって酒も強い。こんな連中に満足するだけ飲ませたら、私の酒蔵が空になってしまう。9 時頃、風が冷たくなったので機関長の部屋へ移動。インスタントラーメンを作った。

遅くなって、今日入港したビシャル号のギャランティの小俣さんから V H F が入った。ビシャルも本船と同じ、50 ミリの鉄板を溶接したけど、前と同じで、アンカーが自重で落ちないと言っていた。同じ図面の船だから、トラブルも同じようだ。アルジェが船混みなので、オラン（少し離れたアルジェリアの港）で揚げ荷をするようだ。

「海員だより」